

札幌近郊のレタス栽培

— 篠路町レタス栽培農家を訪ねて —

雪印種苗(株)中央研究農場

岩見田 慎 二

野菜生産に占めるレタスの伸びは、近年著しいものがあり、一般家庭においても肉類への付け合せやサラダへの利用など新鮮な緑色野菜としての地位は高まる一方で、その需要も周年的なものがあります。

図1,2に全国及び北海道におけるレタスの作付面積と生産量の推移を示しましたが、上に述べたように、作付面積、生産量ともに年々伸びてきており、特に北海道におけるその伸びにはめざましいものが認められます。昭和46年には、作付面積111ha、生産量2,090tであったものが、約10年後の昭和55年にはそれぞれ504ha、11,900tとなり、作付面積で約4.5倍、生産量で約5倍となっています。

北海道におけるレタスの作付面積、生産量を支庁別に見てみると、石狩支庁がともに多く、次いで、胆振、上川、十勝となっており、特に石狩地区は、作付面積、生産量ともに全道の約3割を占

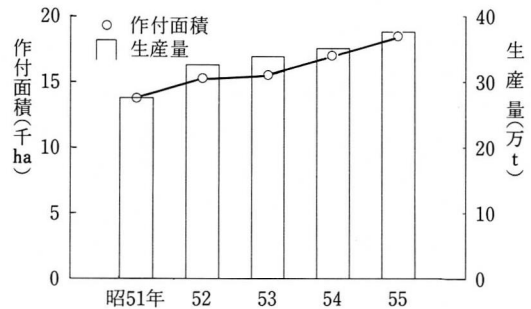


図1 全国におけるレタスの作付面積と生産量の推移 (農水省統計)

め、その割合も年々増加の傾向にあります。これは、道内最大消費地である札幌の近郊であること、また、移出も含め輸送の便が良いことなど立地条件の良さに基づく面が大きいものと考えられます。

そこで、今回は、石狩地区の中で、札幌近郊の篠路町において、レタス栽培を営んでいる農家を訪れ、その栽培技術・経営方針等について話を伺ってきましたので、以下その概要を記してみたいと思います。

1 経営概況

今回訪れた農家は、札幌の中心部から約10km程北へ向かった札幌市篠路町にあり、茨戸の近くのやや粘土質の土壌条件の中でレタス栽培を専門的に行なっています。

耕地面積は約2.5haで、すべてレタスを作付けています。労働力は、当人夫婦の2人でその他に定植・収穫時等に臨時に雇って経営しています。

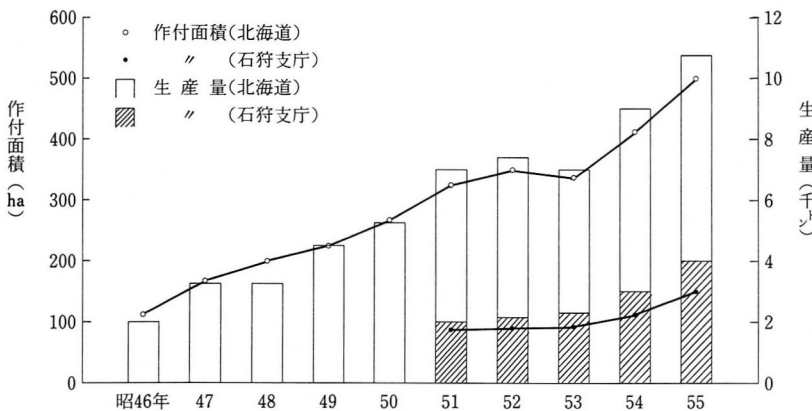


図2 北海道におけるレタスの作付面積と生産量の推移 (農水省統計)

レタス栽培は、15年程前から始めたもので以前はタマネギ・トマトなどを栽培していましたが、経営の安定をはかるためレタスを取り入れ、近年、特に府県の青果会社と契約して、沖縄への移出用として産地直送の形式を取り入れてからは、経営が安定してきているとのことでした。

2 作付体系

おおまかな作付体系を図3に示しましたが、作型は、早春の3月下旬に第1回目の播種を行い、その後約1週間ごとに播種して、7月下旬に最後の播種を行います。ただ、秋どりのものについては、栽培期間が長くなることから7月15日ころから約3～4日ごとに播種しています。

収穫は、初夏どりが6月中・下旬から始まり、秋どりの10月中旬まで約100日間となります。

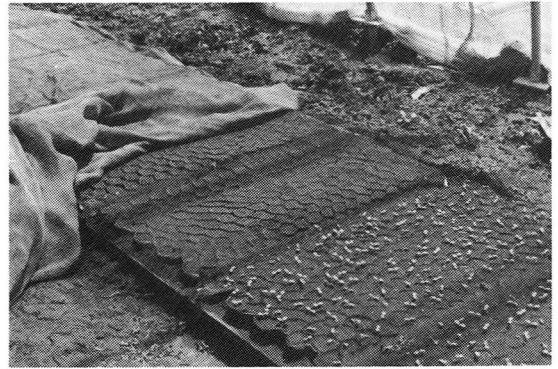
全作型を通じて露地栽培で、特に5月初旬～6月初旬に播種するものは、労力及び経費の軽減のため直播栽培とし、その他は育苗して移植栽培としています。

3 栽培管理

1) 品 種 どの作型も、特に巻きが良いことなどから、ここ数年はカルマー中心となっています。

2) 播種・育苗 育苗は、水稲用の育苗箱を用い、その中に4号ペーパーポットを入れ、1箱あたり約160本の苗をたてて育苗しています。

播種は、床土を入れ、播種後川砂を薄くかけて覆土し、板で鎮圧した後寒冷紗をかけて乾燥を防いでいます。



播種・育苗 水稲用の育苗箱にペーパーポットで育苗播種後寒冷紗で被覆する。(右下方は播種後1週間の苗)



苗の馴化 定植前3～4日間、ハウスの外に出して苗を馴化させる。

2 定 植 育苗中に、2回のずらしを行なって根の発育を促し、健全な苗を育てるよう努めています。また、2回目のずらしは定植直前に行い、その際、ビニールハウスの外へ出して3～4日間馴化させた後定植しています。育苗日数は、20～30日で本葉4～5枚の苗を定植します。

	3月	4	5	6	7	8	9	10
初夏～夏どり (露地移植)								
夏どり (露地直播)								
秋どり (露地移植)								

□ 播種 ✂ 定植 ▨ 収穫

図3 レタスの作付体系

表1 施肥量

	N	P	K
成分量 (10a当り)	25.0 kg ~32.0	16.0 kg ~20.0	22.4 kg ~28.0
堆肥	10 t		
石灰	120kg		
S604(リン硝安カリ)	8~10袋		

栽植密度は、全作型を通じて畦幅 45 cm, 株間 27 cm としていますが、移植栽培の場合は高畦としていたため、条間 45 cm, 株間 27 cm の 2 条植としています。

また、ポリマルチは、直播はもちろんのこと移植栽培でも行なっていません。

1 施肥—土づくり— 畑には、春秋の2度、購入した堆肥及び石灰を施用しており、土づくりに努めていますが、これは後にも述べますが病気を防ぐ大きな要因となっているようです。施肥量は、表1に示すように、10 a 当り成分量で窒素約 30 kg, リン酸約 18 kg, カリ 25 kg 前後を施用しています。

5 病害防除 病害防除は、菌核病・灰色かび病・軟腐病等、早め早めの薬剤散布を行なって防除に努めており、レタスの栽培を始めて以来大きな被害を受けていないとのことで、これは、先にも述べたように春秋の2度堆肥を施用し土づくりに励んだ結果と思われる。

また、3年程前に病害が発生した後、長野県の栽培農家の事例に学んで、畦を平畦から高畦にしたところ、病害の発生が認められなくなったとのことです。

4 出荷体制

この農家の経営の中で、最も特徴あるものの一つが、出荷流通体制で、年間の出荷量の90%以上を、東京の業者と契約して産地直送の形式で沖縄県へ移出しています。

以前は、札幌あるいは東京へ出荷していましたが、価格の変動が激しく、経営が不安定となりやすいため、3年前から青果会社と契約して産地直送の形式をとり入れることにより、現在では、1ケース 400~800 円前後の値幅で価格が安定しているとのことです。



高畦栽培 移植栽培では高畦としている。



堆肥場 春秋の2度、堆肥を購入し、土づくりに励んでいる。

出荷量は、6玉入りのケースで年間5万ケースで契約し、1日500ケースを平均して毎日出荷しています。また、自宅の倉庫内に約3坪の冷蔵庫をもち、収穫して箱に詰めたものを出荷まで予冷しているとのことです。

5 おわりに

以上、今回訪れたレタス栽培農家の栽培と経営の概要をまとめてみましたが、特に感じられたことは、その積極的な経営姿勢でした。通常の出荷体制をとらず、沖縄への移出を考えて、経営の安定化に成功したこと、『畑がしっかりしていればそれで良い』という考えに基づいて、品種の能力に頼ることなく、自ら土づくりに励んで良品を生産していることなど、たいへん感銘を受けました。

今回は、春の育苗中の訪問であったため、収穫間近のレタスを見ることができず、非常に残念でしたが、この次に訪れた時には、きっとすばらしいレタスを見ることができるでしょう。